

女性医師の窓

## 子を持つ女性医師として

羽咋診療所 岩井 里枝子

女性医師支援センターの設立やメンター制度など、ここ数年で女性医師支援のための様々な組織やネットワークが充実しつつあります。私は女性医師として7年目になり1児の母親です。まさに今問題となっている30代子育て中の女性医師で、これら社会的支援体制の充実は非常にありがたく、医師を続けるサポートになっています。初期研修医制度が初めて義務化された年でもあった自分の研修医時代には、このような制度が社会的に設立されるとはとても考えられませんでした。初期研修医として過ごしたのは福島県の中核病院でしたが、そこには女性医師が数十名在籍するにも拘わらず、子育てをしながら医師として働いている女性は一人もいませんでした。その後、結婚を機に石川県に移り住んで医師としての仕事を継続したのですが、幸いにもそこには子育てをしながら医師を続ける先輩の女性医師が多かったので、その存在だけでも私にとって精神的支えとなり、様々な場所で『メンター』として頼りにさせていただいています。私の妊娠出産の際にはここ数年の女性医師支援の追い風によって、スムーズに産休から引き続き育児休暇を取らせていただきました。休暇後の職場復帰に際して多少の不安がありましたが、復帰プログラムを組んでいただき医師として現場に戻る事が出来ました。そのとき支えてくれた周囲の方々には今でも大変感謝しています。

今は子育ての様々なサービスを利用しながら、なんとかフルタイムで仕事を続けている状況ですが、時折子供の姿をみてこのまま仕事を継続していくべきかどうか悩みます。我が家は夫も救急医として勤務しており、夜勤回数も多く私以上に忙しく、更に核家族で両親も遠方におりサポートを期待できない状況のため、様々なサービスを利用してはいますが子供にかかる時間がどうしても少ないように思います。もうすぐ3歳になる我が子をみていると、言葉に出さずに我慢しているように思われて、胸の痛みを感じながら仕事にいく事が度々あります。色々な制度と沢山の方々に支えられて続けている現在の仕事ですが、将来の私、そして我が家にとって無理のない一番良い働き方を模索している段階です。

私としては、これからも臨床の現場で医師として働きたいと考えています。幸いにも現在の私達には女性医師支援の制度が充実しつつあり、その力をお借りして、完全離職だけは避けられるよう、どのような形であっても医師としての仕事を継続したいと考えています。主婦、母親ではありますが、これから女性医師としても仕事に集中して社会に貢献する時期が必ず来るはずで。

また、このような問題は女性医師だけの問題ではなく、働く女性全てに関わる事です。そのベースには社会全体の問題でもある核家族化があると感ずます。女性医師だけの特別な支援措置の拡大ではなく、社会全体で働く女性の目線に合った支援制度の更なる充実が必要と考えます。一番重要なのは、働きながら子育てに従事する女性に対する周囲の方々の理解と支え、これらなくしては社会全体でのスムーズな少子化対策を含めた子育てが出来ないと思います。

私の子育て、医師としての生活も本当に周囲の方々に支えられてなんとか継続できています。日々感謝の気持ちで一杯です。今は周囲に迷惑をかけるばかりですが、私が支えられてきたようにこれからの方々の支えになればと考えています。